宗教社会学論選　　マックス・ヴェーバー著

　　　　　大塚久雄・生松敬三訳　　　　　みすず書房　1972年

　　　　　　　　　　　2014/12/15 報告　松本倫明

著者紹介

ドイツの社会学者、経済学者

西洋近代の文明を他の文明と区別するものを「合理性」と仮定

官僚制分析—————支配の三類型

①合法的支配

②カリスマ的支配

③伝統的支配

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

『宗教社会学論選』

『職業としての学問』

『職業としての政治』

『(遺稿)経済と社会』

~一　序言~

西洋における合理性

|  |
| --- |
| いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる文化的諸現象が姿を現すことになったのか(P5) |

今日、「普遍妥当的」或は「合理的」と認められる程、発展したものはどの分野においても西洋だけにしか見られない。科学、法学、芸術といった諸分野において、合理性の萌芽は各地域でも見られた。しかしどの地域も西洋における発展段階には達していない。

これは経済にも当てはまる。ヴェーバーは資本主義を「交換の可能性を利用し尽くすことによって利潤の獲得を期待する(P11)」ことにもとづく経済行為とする。

近代西洋において、他の地域では見られなかったような資本主義が生まれた原因は以下の通り。

|  |
| --- |
| 形式的に自由な労働を合理的に管理したこと |
| 住居と経営の場を分けたこと(個人財産と経営財産を法的に分離) |
| 合理的な薄記 |

近代西洋以外の場では、経営は横行や領主による「大規模家政」であった。自由な労働を合理的に組織した経営によって、資本主義が発展した。

著者の目的

資本主義、法、科学。これら西洋の諸文化を合理的にせしめたものは何か。問題となるのは、西洋文化独特の「合理主義」である。この合理主義の成立を解明するには、経済的条件を考慮しなければならない。然し、経済的合理主義もまた、その成立において、合理的な「生活態度」に依存しているのである。

ヴェーバーは本書執筆以前に「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」において、禁欲的プロテスタンティズムの合理的倫理が西洋人の心的態度を条件付けた、と記した。本書では、世界宗教の経済倫理を扱い、宗教と経済、社会との関係を分析し、西洋との比較のための問題点を発見することを目的とする。

~二　世界宗教の経済倫理　序論~

世界宗教とは、儒教、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教を指す。

宗教的経済倫理とは、ある行為を実践させる、宗教を根底とした機動力を指す。経済倫理とは主に経済地理や経済史により規定されるものであるが、倫理に基づいて実践される生活様式は宗教によって規定されている。よって、本書では宗教倫理に最も影響を与えた社会層の生活態度を決定した要因を分析していく。

各宗教の主な社会層

儒教……宦官

ヒンドゥー教……ブラフマン(教養者)が秩序を形成　　→平民的秘教者の登場(救世主信仰)

仏教……托鉢僧

イスラム教……訓練を積んだ信仰の戦士→スーフィー派下層市民指導者

ユダヤ教……賤民民族

キリスト教……都市市民

宗教倫理に影響を与えるものは?—————下部構造の分析

宗教倫理は一次的には、告知や約束という形で、宗教的な必要に適合されるものである。一方、社会構造によって宗教が規定されると言う説明もある(ルサンティマン等)。しかしその射程は検討すべきである。下部構造が宗教倫理に与える影響は苦難の評価に見られる。

1. 苦難=神の罰(幸福の神義論)

幸福な人間は自分の幸福の正当性を求める。幸福が名誉や権力と結びつくならば、それは権力者の利害関心の正当化を導く。

1. 苦難=聖(苦難の神義論)

苦難は非日常的な経験であり、その非日常性は聖なるものと見做された。そしてその非日常性は苦行によって近づきうる。

この苦難の経験は個人的な経験である。この個人的な宗教倫理が、共同態の宗教倫理(救済)と結合した時、教団などの組織、制度が発達した。この組織は大衆の救済を目指す(罪の告白等)。繰り返される困窮は集団的・合理的な「救世主」信仰へと繋がった。

来世信仰の登場

世界観の合理化は幸福罪の意味に疑いを生じさせた。それは、善人にとって、余りにも苦悩が多い割には、現世において成功を収める者は「悪しき者」であったからである。これをうけて、宗教倫理は更に合理化する。つまり、インドの業や、予定説が説いた、来世での救済である。合理的宗教倫理の救いは、社会的に蔑視された層を基盤にした。現世で満ち足りた者は救いへの憧れに欠け、従って信仰に篤くないからである。こうして富・権力に対する不信が起こり、神に与えられた「使命」への信仰が起こる。

* 然し乍ら、救済財は、キリスト教等一部を例外として、健康や長寿と言った、実質的・彼岸的なものであった。ある宗教において、最高善とされるものは、宗教意識の担い手の違いによって多様化したのである。

宗教意識の担い手層と世界像

宗教意識の担い手は主に二つの集団に分けられる。

|  |  |
| --- | --- |
| 商工業者・知識人 | 騎士・農民・教権者 |

1. 商工業者・知識人

知識人は理論的合理主義の、商工業者は実践的合理主義の担い手としての役を果たした。知識人は救済の理念を救いの信仰へと高める役を負った。つまり、信仰が世界像を表現することになった。人間の行為を支配するのは利害関心である。しかし世界像は、人間が指向する利害に影響を与える。その世界像こそがまさに「何から」「何へ」「救われる」のかという信仰の理念だったのである。

一方、世界像・生活様式の全面的合理化は、宗教を非合理的なものとされたのである。

1. 騎士・農民・教権者

これらの担い手は行動的な実践生活を送る社会層である。以下は各々の層の特徴である。

|  |  |
| --- | --- |
| 教権者層…救済財の授与を独占する傾向がある→公制度的恩恵 | |
| 政治的官吏層…救済の個別的追求や、国家の競合相手(教会)は、国家の馴化の障害→彼岸の財の追求を蔑視 | |
| 騎士…関心は現世にあったものの、英雄としての非合理的「宿命」の思想→神から名誉や死を受ける | |
| 農民…自然に従属→呪術に親しむ | |
| 西欧的市民層…生活における実践的合理主義への傾向→経済的、技術的合理主義が倫理・生活様式を規定 |

救済財の獲得——————達人意識と日常生活

救済財の獲得は普遍的なものではなく、人間の宗教的な資質に左右された。ここに達人的宗教意識と大衆的宗教意識の対立が起こる。この達人的宗教意識は、救済財の性質に従って、日常生活(経済の場)と多様な関係を持った。

1. 救済財への手段=瞑想

宗教意識と世俗の関係はない為、経済の価値は低められた。

1. 達人層が禁欲的診断を形成

複数人で診断を形成する以上、現世と対立するものや現世を相対化するものは排除された。なぜならそれらは現実世界から人を連れ出すことであったからだ。

この傾向から、現世逃避ではなく、行動的に禁欲を行なう姿勢ができる。この姿勢を発達させたのが、プロテスタンティズムである。

宗教的達人には、神に忠実に現世の秩序の内部で救済の状態にあることを証明する必要があった。そこで「現世」そのものの価値は低下しているのだが、神の欲する活動として、つまり召命として現世を肯定することになった。

実際は、以上の(1)(2)の組み合わせがおこっている。なぜなら宗教は完全には一貫しているわけではないからである。そして生活様式の合理化にも様々な形が見られる。

合理主義の形態

|  |  |
| --- | --- |
| 儒教 | 形而上学の欠如+功利主義=かなり合理的 |
| ルネッサンスの思想 | 「規準」信仰+自然理性信仰=合理的 |
| 仏教 | 祈祷の装置(輪廻蔵)やヨーガによる禁欲的瞑想→計画性=合理性 |

支配の諸形態

以下では更に分析を進めるにあたって重要な述語の解説に入る。

宗教的な支配団体の登場は教会が救済財の授与を独占することを意味した。そこでその支配にはどのような正当性の基礎を必要としたのか。

1. 合法的支配

現代の一般団体、特に政治団体に当てはまる。「公制度」を基にした団体

1. カリスマ的権威

カリスマとは個人の非日常的な資質を指す。被支配者が特定の個人の資質への信仰から自ら服従する支配形態。この支配形態は啓示や霊感により行なわれる為、非合理的である。一方、伝統に囚われない革命的な形態でもある。

1. 伝統主義的権威

日常的な慣習を犯させない、既存のものへの恭順。背くことのできない規範が設定されるが、それには支配者の恣意と恩恵が含まれ、人間的な関係が影響する。故に、非合理的。

1. 伝統とカリスマが日常化

カリスマの後継者争いから、選挙等の規則による支配が生まれる。一方、この形態では支配者の基盤から個人の資質は喪失する。支配者やそのスタッフは日常的になっていき、経済から権力の正当性を得るようになっていく。

集団の制約

人間集団にとって政は負の社会的名誉を与える可能性がある。そこで誰が集団の中に入ることができるのか、制約が生じる。その制約の仕方は二通りある。

1. 身分状況

生活様式の違いによって制約する。法的に支配し収入を独占できるか否かにより、身分が決定され、同一身分であることが集団内での交際の評価となる。

1. 階級状況

財産所有・熟練によって制約される。つまり、生計・営利に関する可能性、市場によって制約

~三　世界宗教の経済倫理　中間考察~

本性では、インドにおける宗教意識が考察される。インドにおいては、最も徹底した現世否定が生み出されただけでなく、それに対応する技術も最高度に発展した。まず、現世否定は如何なる動機から生まれるのかについて考察する。

現世拒否の意義

現世拒否において、以下の二つの類型の対立がある。

|  |
| --- |
| 行動的禁欲…神の道具として聖意に適うよう行動すること。世俗内において、合理的な形成者として「職業」を通じて、人間形成すること。 |
| 神秘論の瞑想的救済の所有…個々人は神的なものの容器であり、現世における(自分の外部の)行為は非合理的。 |

つまり、両者は「現世内的禁欲」と「現世逃避的瞑想」の対立と言える。

しかしこの対立は緩和する可能性もある。行動的禁欲が個人的に極度に専念され、結果的に現世を忌避する場合、及び逃避的瞑想が現世逃避に迄、行き着かず世俗的生活秩序の内部に留まる場合である。実戦の場においては、救済の追求における対立は事実上消失し、両者の結合が起こる。

現世拒否の方向

宗教を基盤とした共同体の誕生は、氏族共同体を脅かした、信徒にとって、究極的には、自然的血縁関係や夫婦関係よりも、信仰上の同報の方が親近たるべしとされたのだ。そして新たな社会的共同態が生まれる。その中では、予言が倫理を展開する。

以降、現世には苦難や憎悪など、信仰の限界が認識される。これは経験的なもの全てが不完全であることの結果であると見做された。ここで一切の人間が不完全なものであることを前提に、無差別な愛という傾向が生まれた。ところがこの宗教的意識は現世の秩序や価値と常に衝突した。この現世の価値観は一方で合理化されていったため、その衝突は益々強くなる。

この対立は経済において最も明白となる。個々の利益の為の呪術は富の獲得を目的としていた。この富の獲得の合理化と、救いの信仰の間に緊張関係が生じる。

合理的な経済は貨幣価格に重きを置く。この貨幣は生活の中で最も非人間的なものである。故に近代資本主義における独自の法則性は、宗教的な同報倫理との関係を断っていく。更に資本主義における人間関係の紐帯は希薄なものである。だからこそ、無差別的な救いの宗教は、非人間的な経済書力の展開に不信をもつ。カトリックが貨幣や財への執着を忌避するのはその為である。

現世逃避的な禁欲は修道僧の個人所有を禁じ、欲求の充足は不可欠なものに限った。しかしここにパラドックスが生じる。禁欲はそれが忌避する富を生み出すのである。この宗教と経済の対立を一貫して避けた体系は二つだけである。すなわちピューリタニズム(職業召命観)と無差別主義の純粋表現たる慈悲(無対象な献身)である。